〈資料紹介〉27
「村岡花子文庫蔵書」～目録作成の過程も含めて～

水谷　悟

2015年３～６月、これまで赤毛のアン記念館・村岡花子文庫で所蔵していた花子関係の蔵書が本学院に寄贈された。この蔵書は「村岡花子文庫蔵書」として本部棟に設置された「収蔵庫」で保存・管理されている。今夏、その目録作業が高等部を卒業した学生たちの手によって実施されたので、「そこに至る道のり」「目録作業の概要」、そして蔵書の内容を紹介していきたい。

そこに至る道のり

「史料整理の仕事、是非やってみたいです！」３月に中高部で実施した社会科学習旅行で京都・奈良を訪れている際、卒業したばかりの高３の生徒が口にした一言である。文学部に進学するという彼女らに村岡花子の蔵書が寄贈されることを話したところ、予想外に嬉しい答えが返ってきた。この言葉が後押しとなり、史料整理および目録作成の作業が実現する運びとなった。それは村岡花子が『赤毛のアン』初版のあとがきに記した「心の妹たちへ」の思いを中継ぎし、次の世代に伝えていければとの思いからであった。英和の卒業生に史料整理のお手伝いを募ってみると、思いの外快い返事が次々と届いた。

目録作業の概要

こうして2015年８月17日（月）から28日（金）の間のなるべく多く人が集れる６日間に、計７名の学生たちが作業を手伝ってくれるなか、目録作成の作業は次の４段階に分けて行われた。

① 史料が移送された時点での現状をできる限り回復し、仮番号を付すこと
② 段ボール箱ごとに蔵書の情報をデータに入力すること
③ 作成したデータを年代順に並び替え、保存箱に入れ直すこと
④ データを再度確認し、番号を付すこと

高等部卒業生による村岡花子文庫　目録入力作業

作業は、学生２人１組で行い、まず①と②の行程を同時に進めながら、仮番号（１～1133）を確認しつつ「蔵書」の所在を１点ずつ確かめ、詳細なデータを更新していった。「蔵書」の運搬を請け負った業者にあらかじめ書棚の上段左側より仮番号を付し写真データを撮ることを依頼し、運び入れられた段ボール箱に便宜上Ａ～Ｚ＋「AA」を記した。書籍のうち洋書は後回しとし、和書の「書名」「書名読み」「シリーズ名」「著者名」「読み、原綴」「訳者」「出版地」「出版社」「出版年月日」「形態」「箱（の有無）」の12項目にわたりデータを入力した。

学生諸君の作業が迅速であったため、第一次受け入れの和書を網羅する形で目録化することができた。作成したデータを出版年代順に並び替え、仮番号の欠番や原本の確認できない不明分を抜いた結果、第一次受け入れとして総計1068冊に及ぶ蔵書が寄贈されたことがわかった。

蔵書の概要

作業から明らかになった「蔵書」1068冊の出版年代は、1876年（明治９）から始まり2011年（平成23）に至る、135年の長きにわたっている。花子本人は1968年（昭和43）に75歳で亡くなっているので、それ以降の書籍については娘のみどりさん、または孫の美枝さん、恵理さんによって記念館設立のタイミングなどで「書棚」に加えられたものと推察するのが正しいだろう。

これらの「蔵書」を出版年代別に見てみると、次の表の通りである。

表の数値のみを見れば、関東大震災によって夫の印刷会社が倒産し、教文館で翻訳と編集を

【表】「村岡花子文庫蔵書」出版年代（2015年９月時点）

年代	冊数	花子の年齢	年代	冊数	花子の年齢
1870～1879	1	—	1950～1959	396	57～66
1880～1889	0	—	1960～1969	259	67～75
1890～1899	0	0～6	1970～1979	32	—
1900～1909	4	7～16	1980～1989	14	—
1910～1919	12	17～26	1990～1999	10	—
1920～1929	55	27～36	2000～2009	13	—
1930～1939	112	37～46	2010～2015	1	—
1940～1945	76	47～52	不明	7	—
1946～1949	76	53～56			

手がけるとともに、青蘭社を自宅に設立し、長男道雄の早逝の悲しみをマーク・トウェイン作『王子と乞食』の翻訳で乗り越えた1920年代に蔵書が増え始めている。そして、婦人参政権獲得運動に力を注ぎつつ、エレナ・ポーター作『パレアナの成長』を翻訳し、JOAKの嘱託となり「子供の新聞」コーナーを担当し始めた1930年代に戦前の一つのピークが形成されている。

その後、アジア・太平洋戦争を経て、国内の出版状況が厳しくなるなかで蔵書の増加冊数は抑えられている。その出版事情は戦後の占領下でも継続され、朝鮮戦争を経て、日本社会が「特需」の恩恵を被りつつ、国際社会に復帰するなかで、L.M.モンゴメリ作『赤毛のアン』が世に送り出された。その後、日本社会が高度経済成長期を迎えるのと歩を合わせるかのように、花子自身の仕事も増え、ウィーダ作『フランダースの犬』、エレナ・ポーター作『くり毛のパレアナ』、モンゴメリ作『風の中のエミリー』などが次々と発表され、それに伴い蔵書数も関連図書を中心に増加していったと思われる。勿論、書籍というのは、必ずしも出版年と購入した年代とが重なるとは限らないので、これはあくまで参考程度の情報と言えよう。

「運命の一冊」

さて、蔵書内容に目を向ける時、その筆頭は名作『赤毛のアン』を生んだ「運命の一冊」、1908年出版の*Anne of Green Gables*であろう**【番号５】**。次に、太平洋戦争の開戦と敗戦を挟み、13年の時を経て1952年５月10日付けで三笠書房より日本で初めて刊行された『赤毛のアン』が収められている**【番号425】**。「蔵書」からわかることは「赤毛のアン」シリーズが人気を博し、ポプラ社、旺文社、偕成社、講談社、集英社、小学館、文研出版、岩崎書店、新潮社の各社から出版されていた事実である。ここで面白いのは、花子本人がそれら「赤毛のアン」シリーズの表紙に「保存版一九五五、十二月　第一版」「函入り初版」などと朱書きしていることである**【番号520】**。膨大な書籍や資料に囲まれながら、家事と原稿の締切に追われて翻訳をしていた女流文学者の姿が垣間見えてくる。

「腹心の友」たちとの交流

続いて目を引くのが、白蓮（柳原燁子）・片山廣子といった東洋英和出身の「腹心の友」との交流を思わせる蔵書である。

まず柳原燁子の著作は５冊収められている。白蓮の作品としては第一歌集『踏絵』が知られているが、「蔵書」には伊藤燁子時代の『幻の華』**【番号15】**のほかは、燁子が伊藤伝右衛門のもとから出奔し宮崎龍介と一緒になった後、病身の龍介に代わり一家を支えていた頃の作品であった。『則天武后』（改造社）**【番号24】**、『流転』（不二書房）**【番号57】**、『筑紫集』（萬里閣書房）**【番号58】**、『荊棘（いばら）の實（み）』（1928年９月、新潮社）**【番号61】**。

次に花子にとって英米文学の道を拓いてくれた片山廣子の著作として『翡翠（かわせみ）』『燈火節（とうかせつ）』『歌集　野に住みて』の３冊が収められている。なかでも『翡翠』は佐佐木信綱の主宰する短歌結社「竹柏会」の出版部から1916年３月に刊行されたものである**【番号10】**。

他にも、石井桃子、今井邦子、生方たつえ、五島美代子、林芙美子、深尾須磨子、森田たま、吉屋信子などの著作が数多く収められており、世代や期間に多少の幅があるとは言え、花子の交流していた女流文学者たちの存在とその人脈を考える上で示唆に富んでいる。

女流文学者の蔵書形成

交流のあった人々の著作群とは別に、翻訳文学を主とする村岡花子はどのような蔵書を形成し、作品を生み出していったのであろうか。無論、洋書の全貌を明らかにした上でなければ片手落ちになるのであるが、あえて資料紹介の範囲で和書からわかることを述べてみたい。

漱石、鴎外、藤村ら近代日本の文豪と呼ばれる作家たちの全集を揃える一方、「少年少女世界文学全集」、「世界童話体系」「少女世界名作全集」「少年少女動物名作全集」「世界少女名作全集」「日本幼年童話全集」などのシリーズ作品が顕著である。花子本人が訳者の一人として入っているという事情もあるが、その対象は英米文学を軸に据えながらも、ヨーロッパ各国、日本、中国、インドなどのアジア圏に及び、読者の対象としては「少年少女」「幼年」、なかでも「少女」が常に意識されて設定されているのが窺い知れる。ほかにも蔵書群を詳しく分析していけば、村岡花子のみならず近現代日本の女流文学、翻訳文学を考察する上で看過できない特筆すべき項目が浮上するであろう。今回の目録作成の作業がその端緒となれば幸いである。

（中高部社会科教諭　史料室委員）